

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第151号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成20年3月21日

ウミガラス



2007. 5. 4 天売島

撮影者 早坂泰夫(札幌市厚別区)



も く じ

北海道でノジコは繁殖しているか？

京都府 梶田 学 2

2006年に利尻島で観察された希少種等の記録

利尻島 小杉 和樹 4

北海道におけるオオルリの繁殖期の分布

美唄市 藤巻 裕蔵 6

千歳市でジョウビタキ越冬 広 報 部 7

ヤブサメの声と私の聴力 札幌市北区 樋口 孝城 8

鳥好きの文学散歩9 井上 靖「海峡」

札幌市手稲区 高橋 良直 10

探鳥会ほうこく 10

鳥 民 だ よ り 13

探鳥会あんない 14

北海道でノジコは繁殖しているか？

京都府 梶田 学

ノジコ *Emberiza sulphurata*は、アオジに良く似ていますが、それより少し小型で、眼の周りに白い縁取りがある、可愛い鳥です。越冬期には、台湾、中国南部、フィリピンなどの海外でも観察されますが、繁殖地は地球上で日本の本州（東北地方～中部、北陸まで）しか知られていません。他に同様な繁殖分布域を持つ種は皆無で、同じように日本でのみ繁殖するセグロセキレイやカヤクグリが北海道でも繁殖するのに対し、ノジコは北海道での繁殖記録が知られていないのです。そのため、北海道で野鳥を観察している人達にとって、ノジコは馴染みのない鳥になっている事と思います。

しかし、かつては北海道でもノジコが繁殖すると考えられていた時代がありました。

山階 (1935) は「少数が北海道にて繁殖する」と書いていますし、日本の鳥類記録を集めて1958年に発行された『日本鳥類目録改訂第4版』にも「北海道では稀だが、大雪山で8月に観察されたことがある」と書かれています。これらは、いずれも「1925年8月23日沼ノ平より旭岳に登る際大灌木帯にて之を見る」という犬飼哲夫氏による大雪山でのノジコ観察記録 (山階 1935) に基づくものです。また、江戸時代末期の古い記録ですが1864年10月21日に2羽が函館で採集されたことがあり (Whitely 1867)、この記録も北海道でノジコが繁殖すると考えられた理由だと思われます。繁殖を終えて南下するはずの秋に函館で採集されれば、北海道のどこかで繁殖していると考えられたのも不思議ではありません。

残念ながら、犬飼氏の観察記録以降、北海道においてノジコの確実な夏季生息記録は得られず、巢やヒナが見つ

るなどの繁殖確認もなされなかったためか、1974年発行の『日本鳥類目録改訂第5版』では「北海道での繁殖は疑問である」と書かれてしまい、2000年発行の同第6版では、ついにノジコの分布域から北海道が削除されてしまいました。

目録の記述から抹消されてしまった北海道ですが、実のところノジコの確認記録自体は、近年でも、いくつか知られています。例えば、1992、1993、1995年のいずれも5月に渡島大島で各1羽が鳥類標識調査の際、捕獲により確認され (佐藤理夫さん私信)、焼尻島でも2004年5月に同じく標識調査で3羽が確認されています (有田 2004、辻幸治さん私信)。

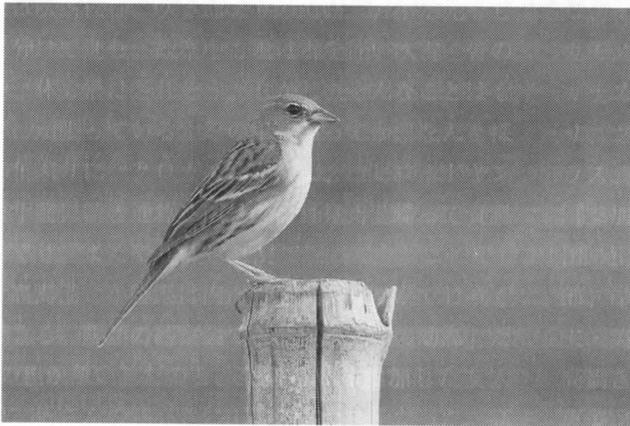
また、寺沢 (2000) によれば、5月に天売島、6月に利



ノジコ雄成長 (標識個体) 2003. 10. 16
京都府京都大学芦生研究林 撮影 筆者

尻島で記録されており、時期は明記されていないものの礼文島でも記録があると記述されています。これら離島だけでなく、環境省の風蓮湖鳥類観測ステーションでも2004年に1羽が標識放鳥されています(山階鳥類研究所 2005)。

また、2004年8月26日にポロト自然休養林のもみじ平から1km程下がった、ウツナイ川右岸林道沿いで、ノジコと思われる鳥が2羽観察されたとの情報があります(早川貞臣さん私信)。この観察は、犬飼氏の観察と同じく、写真や標本などが得られていないので、確実な記録とは言えませんが、大雪山での記録と年こそ違うものの3日しか変わらない時期の観察例です。



ノジコ 2006. 4. 30 山口県萩市見鳥
撮影 三島隆伸氏

このように記録が多いとは言えませんが、本州でしか繁殖しない小鳥が、さらに北方に位置する北海道のあちこちで観察されるのは、とても奇妙な事のように思われます。少数とはいえ、渡来しているのが確実な北海道で、本当にノジコは繁殖していないのでしょうか?

京都在住の私が、このような事を気にするのには理由があります。ノジコの生息分布から北海道を削除してしまった『日本鳥類目録改訂第6版』は、日本鳥学会から発行されていますが、現在、学会では次の改訂第7版に向けて日本の鳥類記録の整備が進められています(私は、その整備係をしています)。鳥類標識調査の結果などから、北海道のノジコの記録が第7版で復活する可能性は高そうですが、確実な繁殖記録のない現状だと「迷って渡来している」事になってしまいそうです。しかし、6月や8月にも観察例がある事を考えると、もしかしたら北海道のどこかで繁殖しているのではないかという疑念をぬぐい去る事ができません。できるものなら改訂版の発行までにはっきりさせて、北海道におけるノジコの状況を正確に掲載したいと考えている次第です。しかしながら、これまで確認された記録が少数であることから、沢山の個体が繁殖しているとは考えられず、発見率を上げるためにも、できるだけ多くの人に注意を向けていただきたいと思います。思っているわけです。

本州中部や北陸地方でノジコは、アオジに比べて沢筋や湧水地など林の中の小さな湿地を繁殖環境として好む傾向があるようです。ただし、両種が隣接して生息している事もしばしば観察されます。また、東北地方では、カラマツの植林地でも繁殖しているそうです。形態的にはアオジよりもノジコの方が少し小型で、胸の縦斑が少ないなど羽色も多少異なり、さえずりや地鳴きも少し違いますが、基本的には良く似ていますので慣れないと見逃してしまいそうです。割と簡単に区別できるポイントとして、下嘴の色があり、アオジやクロジの下嘴は肌色(ピンク色)味が強いのですが、ノジコは青味がかった灰色(青灰色もしくは鉛色)をしていて、メジロの下嘴の色にちょっと似ています。

「ノジコなんて北海道にいるわけがないから、みんなアオジ」と思い込んでしまうと、なかなか見つからなさそうなのですが、「もしかしたらノジコかも」と思い直して、ちょっと詳しく嘴など観察していただくと意外にあっさり「世界初!本州以外のノジコ繁殖地」が北海道で見つかるかもしれません。準絶滅危惧種に指定されているこの種を保全するためにも、正確な繁殖分布情報は不可欠です。ぜひ、今後一層の注意を向けていただけるよう、よろしく願いいたします。ノジコあるいはノジコと思われる鳥を観察されたなら、私または北海道野鳥愛護会の樋口さんへ是非ご一報下さい。

〒603-8227

京都府京都市北区紫野北舟岡町49

梶田 学

Tel. & Fax. 075-431-5630

E-mail: kaji-m@m9.dion.ne.jp

〒002-8065

札幌市北区拓北5条2丁目10-17

樋口 孝城

Tel. & Fax. 011-771-4470

E-mail: higuchi@hoku-iryu-u.ac.jp

引用文献

- 有田 智彦(2004)焼尻島春調査. BANDER NEWS IN HOKKAIDO(2): 10-14.
 寺沢 孝毅(2000)北海道 島の野鳥. 北海道新聞社, 札幌.
 Whitely, H. (1867) Notes on birds collected near Hakodate in northern Japan. Ibis: 193-211.
 山階鳥類研究所(2005)平成16年度鳥類標識調査報告書. 山階鳥類研究所, 我孫子.
 山階 芳麿(1935)北海道大雪山の鳥類に就いて. Trans. Biogeogr. Soc. Japan 1(1): 14-48+1 Plate.

2006年に利尻島で観察された希少種等の記録

利尻島 小杉和樹

利尻島では、これまでに280種程度の野鳥が記録され、その観察種数は毎年増えています。このような利尻島での希少種や利尻島初記録といった記録は、利尻町立博物館年報「利尻研究」に、そのほとんどが報告されています。

2006年にはウミバト、シベリアムクドリ、イナバヒタキの利尻島初記録とサンショウクイの写真撮影と再観察記録が利尻研究26号に報告されたところですが、この報告は北海道野鳥愛護会より依頼を受け、利尻研究に独立して報告されたそれらの記録を、各著者の了解を得て統合して報告するものです。本報告に用いた写真についても撮影者の了解を得て転載しました。なお、種の同定等に用いた文献については利尻研究の本文をご覧ください。本文のタイトルと執筆者をそれぞれの文末に記載しました。また、利尻研究掲載の該当本文は以下のアドレスからも閲覧が可能です。
<http://web.mac.com/rishiri/iWeb/NHR/Home.html>

サンショウクイ

サンショウクイは北海道ではごく希な旅鳥で、本種の利尻島における記録は1987年5月17日に小杉が利尻町森林公園管理道脇のトドマツの枝で1羽を観察したものが、利尻島での初記録となっていますが、その時は写真撮影ができませんでした。また、雌雄は不明でした。その後、利尻島で本種の観察記録はないままでしたが、2006年5月8日午後1時半頃に、1987年と同じ利尻町森林公園中央部で風間健太郎さん（函館市）が発見し、写真を撮影しました。

額が白く、頭頂から後頭と過眼線が黒いことから雄成鳥と判断されました。人を恐れず、観察者の10m以内に接近



サンショウクイ

し、捕虫を5分ほど同じ場所で2～3度くり返した後、道路沿いの林縁に沿って北方向「池の森」へ向かって移動したと報告されています。さらに同日の午後3時頃、同公園東部「小鳥の森」で雄成鳥1羽を観察し、この個体も林縁のトドマツ上で捕虫をくり返していたとのこと。同日に観察された2羽が同じ個体かどうかは不明ですが、観察場所が離れていたため別個体として扱われました。

利尻研究(26):21-22, 2007. 利尻島におけるサンショウクイの観察記録

報告者: 風間健太郎、小杉和樹

シベリアムクドリ

シベリアムクドリは、希な旅鳥として石川県舳倉島、山形県飛鳥、八重山諸島から記録がありますが、これまで北海道からの記録はありませんでした。

2006年5月7日午後5時頃、利尻富士町鬼脇字鬼脇の栗山公園において20cmほどの大きさの見慣れない鳥1羽を大野陽子さん（礼文町）が発見し、約5分間の観察と写真撮影をしました。観察中、この個体は単独で草地に降り立ち、草に潜む虫を採餌しているように見えたと報告しています。しかし、しばらくすると突然北東方向の民家の庭先に移動し、その後すぐに利尻山方面の森に飛び去ってしまったとのこと。



シベリアムクドリ

観察された特徴から、シベリアムクドリではないかと判断し、後日、小杉とともに写真の確認を再度行ない、1) 頭頂から後頭にかけて明瞭な黒色の斑があること、2) 緑色味を帯びた黒色の翼、3) 羽先が白い大雨覆・中雨覆を

備えていること、4) 頭部は暗灰白色でコムクドリに見られる頬の褐色斑が見当たらないこと、5) 下腹から下尾筒の淡黄色が目立つことから、シベリアムクドリの特徴によく合致したため、本種であることを再確認しました。なお、頭部黒色斑が目立ち、背と肩羽は褐色味のない黒色で、翼に緑色味が強い事などから本個体を雄と判断しました。

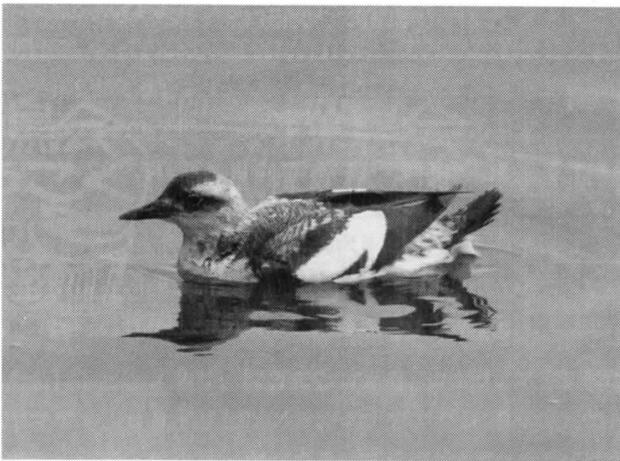
本種は、前述したようなこれまでの観察記録から、春の渡り期には越冬地である東南アジアから日本列島の日本海側の島嶼等の中継しながら北上し、繁殖地の沿海地方に上陸することも考えられ、今後も観察者の増加等により本種の飛来記録が利尻島で増加するものと推測されています。

利尻研究(26):29-30, 2007. 利尻島において観察されたシベリアムクドリ

報告者: 大野陽子、小杉和樹

ウミバト

最初、田牧和広さん(利尻富士町)が、2006年12月4日に利尻島北部にある雄忠志内漁港内でウミバトを観察し、その後同所で12月21日まで継続して観察されました。観察された個体は、ウミガラスより小さく、体全体が灰色で、ほぼ同じ大きさのケイマフリの色合いとは異なって見えました。翼は黒色で、雨覆には大きな白斑があり、その長楕円形の白斑中央部には楔形の黒帯が入っていました。頭部から胸にかけては灰白色で、頭頂と目の周辺および過眼線



ウミバト

は黒色でした。上背は暗灰色に見え、細い暗灰色の横帯が認められました。嘴は黒色で、潜水時によく見られる脚は朱色をしていました。これらの特徴等からウミバト成鳥冬羽と判断しました。

初回の観察時には、10時30分から13時30分までのおよそ3時間ほど観察したとのことで、漁港内で羽毛の手入れや海面上での羽ばたきを行うほか、潜水行動を頻繁に繰り返し、時折小魚が嘴に咥えられているところを目撃されたと報告されています。

ウミバトは主に北海道東部に冬鳥として訪れますが、道

北では非常に希な冬鳥と考えられています。道北地域では、2000年1月23日に疋田英子さん(稚内市)が稚内市の稚内港にて、ケイマフりに寄り添うように海面を泳いでいた1羽の写真撮影に成功した記録のみと思われます。

利尻島での確認は今回が初めてとなりました。国内ではウミバトとアリュウシャンウミバトの2亜種が確認されていますが、今回観察された個体の雨覆の白斑は極めて顕著だったことから、アリュウシャンウミバトに属するものと思われています。

利尻研究(26):45-46, 2007. 利尻島におけるウミバトの初記録

報告者: 田牧和広、佐藤雅彦、小杉和樹

イナバヒタキ

イナバヒタキはトルコからロシア南部・モンゴル・中国北部で繁殖し、冬季はアフリカ中部および東部からアラビアを経てインド北西部に渡るサバクヒタキ属の1種です。2006年6月2日午後3時頃、利尻町杓形にある杓形港付近の空き地で見慣れぬ鳥1羽を佐藤里恵さん(利尻町)が発見し、5分間程度の観察と写真撮影を行いました。その後、川崎康弘さん(小清水町)と小杉が加わり、撮影された写真をもとに詳しい検討が行われた結果、この鳥をイナバヒタキと判断しました。

観察された個体は単独で、シロツメクサやセイヨウタンポポなどの丈の低い草本がまばらに生える砂礫地を跳ね歩きながら、小石の脇などにいる昆虫類を採餌しているような行動が見られたとのことです。上面がベージュ色で、地上での胸を反ったような姿勢が見られ、尾は長めで白く、先端部分が黒でした。これらの行動や容姿からサバクヒタキ属の1種であり、更に初列、次列風切の褐色味が強いことから第1回冬羽であると考えられました。個体の体上面は灰色味を帯びた赤~黄褐色で、体下面は白色、眉斑が認められ、頬から胸および脇は橙褐色でした。これらの特徴



イナバヒタキ

から、イナバヒタキまたはハシグロヒタキのどちらかであると考えられました。

イナバヒタキとハシグロヒタキは酷似しますが、1) 尾羽先端にハシグロヒタキに見られるような細い白色が確認できず、黒褐色が見られること、2) 目先の黒色部がよりしっかりしていること、3) 雨覆先端にバフ帯があり、もともと外側の小翼羽と三列風切の黒褐色が目立つこと、4) 近くに降り立ったカワラヒワと比較して本個体の体長は15-16cmと推定されたこと、以上の点からイナバヒタキであると判断しました。なお、今回の観察はこれまでに利尻島および北海道においてイナバヒタキが確認されたことはわたしたちが知る限りないため、今回が北海道におけるイナバヒタキの初記録と思われる。

サバクヒタキ属の国内での記録は、イナバヒタキ、ハシ

グロヒタキ、セグロサバクヒタキ、サバクヒタキの4種が報告されています。これまでの記録によると、イナバヒタキは南千島、本州、対馬で、ハシグロヒタキは北海道、本州、対馬、小笠原諸島、硫黄列島にて、セグロサバクヒタキは北海道、本州、舩倉島、対馬、そして、サバクヒタキは本州、舩倉島、四国、小笠原諸島、奄美諸島においてそれぞれ確認されています。

利尻島におけるサバクヒタキ属の飛来記録にはハシグロヒタキとセグロサバクヒタキがあり、今回の観察によって3種3個体が利尻島から確認されたことになりました。

利尻研究(26): 51-52, 2007. 利尻島におけるイナバヒタキの初記録

報告者: 佐藤里恵、小杉和樹、川崎康弘

北海道におけるオオルリの繁殖期の分布

美唄市 藤 卷 裕 蔵

本誌149号でキビタキの分布について紹介した。今回は同じヒタキ科に属するオオルリの分布についてキビタキと比較しながら述べる。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、キビタキの場合と同じである。

分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のオオルリの分布を示した。分布図を見ると(149号のキビタキの分布図と比べながら見ていただきたい)、オオルリは山間部のほか、石狩平野や十勝平野など農耕地や住宅地の多い平野部にも生息しているが、石狩平野、十勝平野、北見盆地などの平野部ではキビタキに比べて出現する区画が少ない。これは、キビタキが平野部で小規模でも林があれば生息する機会が多いのに、オオルリはあまり小さな林には生息しないためである。このような違いは次の生息環境でもう少し詳しく述べる。

生息環境と観察個体数

生息環境別に出現率(全調査路数に対するオオルリが観察された調査路数の割合)をみると、オオルリはハイマツ帯では出現せず、常緑針葉樹林で20%、針広混交林で50%、落葉広葉樹林で57%、カラマツ人工林で27%で(表1)、出現率はキビタキに比べると全般に低く、森林で

は常緑針葉樹林とカラマツ人工林で低かった。出現率は農耕地・林で出現率は32%と、むしろ常緑針葉樹林やカラマツ人工林におけるより高かったが、農耕地では7%、住宅地で3%と非常に低かった(表1)。キビタキの出現率が農耕地・林で58%、農耕地で27%であったのに比べると、オオルリの出現率が農耕地で低いのが目立つ。調査路沿いに林があっても20%未満の場合に環境区分で「農耕地」としているが、キビタキはこのような環境でも生息していることがあるが、オオルリはほとんど生息していない。このようなオオルリの生息状況が「農耕地」で出現率が低い理由で、上述の平野部における分布にも反映している。

調査路2km当たりの平均観察個体数は、常緑針葉樹林で0.1±0.4(平均値±標準偏差)、針広混交林で0.5±0.6、落葉広葉樹林で0.5±0.8、カラマツ人工林で0.05±0.2、農耕地・林で0.1±0.3、農耕地で0.01±0.1であった。針広混交林と落葉広葉樹林における観察個体数が他のタイプの森林より多い点は、キビタキと共通しており、これは両種とも採餌などでおもに落葉広葉樹を利用するためであろう。

表1. オオルリの生息環境別・標高別の出現率(%)

生息環境	調査路数	標高(m)					全体
		~200	201~400	401~600	601~800	801~	
ハイマツ林	11	—	—	—	—	0	0
常緑針葉樹林	15	60	0	0	0	0	20
針広混交林	150	39	76	57	26	15	50
落葉広葉樹林	175	61	56	60	33	25	57
カラマツ人工林	22	38	18	33	—	—	27
農耕地・林	217	32	34	14	0	—	32
農耕地	246	74	8	0	—	—	7
住宅地	30	4	0	0	—	—	3

ヤブサメの声と私の聴力

札幌市北区 樋口孝城

数年前からヤブサメの声がほとんど聞こえなくなりました。探鳥会などで他の人たちが、「ヤブサメが鳴いていますね。」と言っているのに、私には聞こえないのです。以前は聞こえていました。「シシシシシ……」という声を聞いては、さてどこにいるのだろうかと思ひながら目を皿にして探したものです。

「年をとるとヤブサメの声が聞こえなくなる」ということはよく言われていることです。そうすると私も年寄りの仲間入りかなと、ふと感じたりしました。「ヤブサメの声が聞こえるうちはまだ若い」とも言われますが、逆は必ずしも真ならずです。でも、これは若いつもりの高齢探鳥家？の自慢材料の一つになっていることは確かでしょう。私の年齢についてはこれからの話で大切なのできちんと示しておかなければなりません。現在満62歳と6ヶ月です。決して年寄りではありません。愛護会の幹事をやらせてもらっていますが、毎回の幹事会に集まるメンバーの中では、まだ若い方に入ります。

数年前からと書きましたが、正確にはよくわかりません。でも別の資料から推測できます。それは十数年前から毎年4月に受けている人間ドックでの聴力検査結果です。平成12年までは何も問題はなかったのですが、翌13年には『軽度の高音域の聴力障害が検査上みられました。一過性の事や検査手技上のこともありますので、この検査のみでは確定的なことは言えません。』と書かれていました。そして、その翌年(平成14年)には『難聴が認められます。年齢的なものと思われる。』という悲しい宣告でした。57歳の時です。ですから、5年前からはほぼ確実に、多分6年前からヤブサメの声が聞こえなくなっていたものと考えられ

ます。

さて、ここから「ヤブサメの声」と「聴力」について少しは真面目に書いていきます。幸いなことに、頼めば音の分析や聴力測定などをしてもらえる人がいる職場環境なので、何人かの皆様に必要資料などの紹介も含めて、ご協力いただきました。

図1と図2はそれぞれヤブサメとウグイスの鳴き声のサウンドスペクトログラムです。音声分析結果を、横軸に時間、縦軸に周波数を取り濃淡を強さとして表したものです。周波数については後でも出てきますが、周波数が高くなるほど高い声になります。まずは先に図2のウグイスの方を見て下さい。「ホーホケキョ」の部分です。ここでは始まりの「ホー」が1秒とちょっと続き、次いで「ホケキョ」となりますが、それは「ホ」、「ケ」、「キョ」3部分から成っています。私たちが聞く声のメインは基音です。ウグイスはさえずりの名手で、喉をふくらませての共鳴などにより倍音(1オクターブや2オクターブ上の音)も発生させ、それがあの美しい声をつくっています。でも、それは置いておいて、ここではウグイスはだいたい1700Hzから3100Hz(Hz:1秒間の振動数)の間で音程を変えていることに注目して下さい。「ホケキョ」の部分にとっても高い周波数の共鳴音が見られますが、それらはその部分の基音の倍音で、実際にそれらが私たちの耳にはっきりと聞こえるわけではありません。

ウグイスに比べてヤブサメの声はかなり単調です。図1を見て下さい。ここでは「シ」が17回続いています。1秒間に5回ほど「シ」が入ります。ポイントはその周波数が8000Hzから9000Hzの間で一定であることです。ウグイス

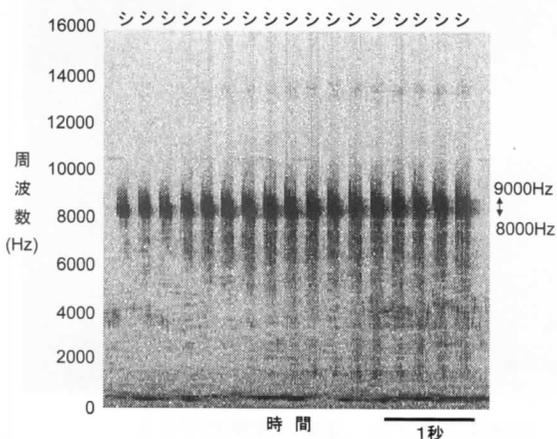


図1 ヤブサメのサウンドスペクトログラム

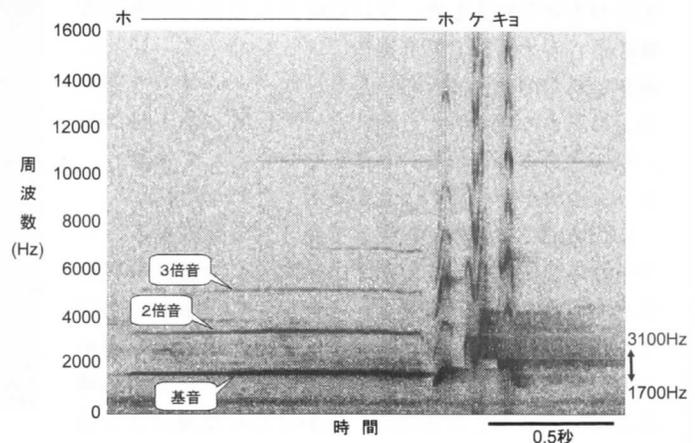


図2 ウグイスのサウンドスペクトログラム

と比較するとずっと高い音です。ちなみに、ヤブサメは「シ」を始めは小さく、だんだん大きくして行って、普通は十数回続けては一息し、またそれを繰り返します。息継ぎが必要なのでしょう。

次は人間の聴力です。聴力検査では被検者にヘッドホン越しに一定の周波数の音（純音）をいくつか聞かせ、とても小さい音から徐々に大きくして行って、それぞれの音がどのくらいの大きさになったら聞こえるかを調べます。図3は私の聴力図に、いくつかの関係事項を書き加えたものです。聴力は左右それぞれの耳について検査しますが、私の聴力については、それぞれの周波数に対して、左右どちらか良い方をとっています。

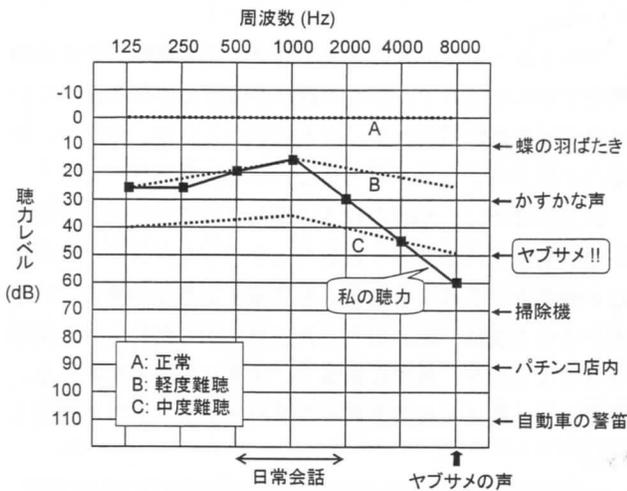


図3 私の聴力図

横軸の周波数は前述したように音の高低を表すもので、これが高く（大きく）なるほど、つまり図の右に行くほど音は高くなります。通常の聴力検査では8000Hzまでです。私たちの日常会話での声の周波数は大部分が500Hzから2000Hzの範囲に入ります。縦軸の聴力レベルはdB（デシベル）という音圧で表されますが、これは音の大きさ（強さ）で、数値が大きくなるほど（図の下に行くほど）、大きな音になります。音の大きさは音源からの距離によって異なりますが、極めておおまかには図の右に示したような感じになります。ちょっと面倒なのでややこしい理論は省略しますが、20dBの差は音圧で10倍の違いになり、どこか（多分、数m離れたところ）で鳴いているヤブサメの声は、掃除機の音の10分の1の音圧という見当です。

図3において、点線Aが全くの正常です。点線Bよりも下になると軽度の難聴、更に点線Cよりも下になると中度の難聴とされていますが、軽度の難聴であっても日常生活において全く支障はありません。ですから私は何も困りません。問題は普段はあまり関係ないほどの高い音です。図1のヤブサメの声の周波数を見て下さい。8000Hzから9000Hzです。図3に戻って、8000Hzの私の聴力を見て下さい。中度難聴のレベルより下です。数m以上離れたところ

ろでヤブサメが鳴いていても聞こえないことになります。でも、至近距離（おそらく2、3m以内）で鳴いてくれたら聞こえます。そんな時は少し嬉しい思いをします。

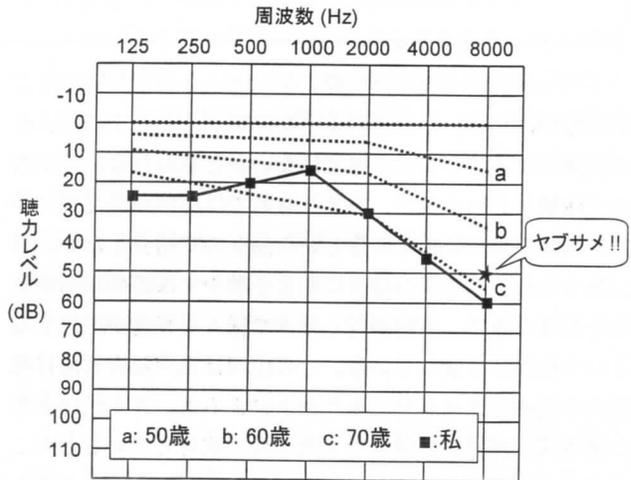


図4 聴力の生理的年齢変化

始めの方で、「難聴は年齢的なもの」と記しました。これはかなり直接的な表現です。ちょっと遠回しには「生理的なもの」という表現があります。「年ですから・・・」と言われるとがっかりする人がいるかもしれないので、ちょっと小難しそうに言うわけです。「年齢的」も「生理的」も基本的には大差ありません。それはさておき、私の場合、本当に年のせいなのでしょう。図4に聴力の生理的年齢変化の概要を表しています。年をとるとともに高い音が聞こえにくくなるのは確かです。これまた極めておおまかですが、50歳、60歳、70歳の聴力を示しています。65歳の人であれば、だいたいbとcの間ぐらいと見ていただければいいでしょう。この図から類推する限りにおいて、普通にヤブサメの声が聞こえるのは平均的には60歳代半ば過ぎまでです。実際にはどうかを何人かに聞いた限りにおいては、この類推はほぼ当たっているようでした。70歳を越えてまだ聞こえる人は丈夫な耳の持ち主ということになります。どうぞ自慢して下さい。

私の聴力は日常会話範囲を除いて、高音域はもちろん、低音域もが70歳を下回っています。耳の病気のようなものはありません。どうやら年に比べて耳の老化が早いようです。ヤブサメの声はあまり聞こえませんが、人間の声で、日常会話の周波数範囲であれば、ひそひそ話でもまだ十分聞こえます。どうぞご注意を。

なお、ヤブサメおよびウグイスの鳴き声については、北海道新聞野生生物基金による「北海道の野鳥データベース」(<http://jyoho.hokkaido-np.co.jp/wildbird/>)にあるものを使わせていただきました。これらの鳴き声は北海道野鳥愛護会会員の田辺至さんの録音によるものであることを付け加えておきます。

鳥好きの文学散歩 9

井上 靖「海峡」

札幌市手稲区 高橋 良直

「バードウォッチング小説」などという言葉聞いたことはないけれど、もしそのような分類があるとすれば、その代表になるのがこの小説ではないかと思われる。井上靖の「海峡」という名の、あまり有名ではない小説だが、多数の種類が鳥が登場する珍しい作品なので紹介したい。鳥に魅せられ、鳥の声の録音に執念を燃やす医師の庄司が重要な登場人物で、庄司が行く先々で様々な野鳥が出現するという仕掛けになっている。この庄司は鳥声録音家蒲谷鶴彦氏を彷彿とさせるが、あとがきによると、井上氏は実際に蒲谷氏に同行して伊豆や下北半島に取材しているとのことであり、鳥についても随分と知見を深められたようである。

小説の主題は、医師の庄司と妻由加里、由加里に惹かれる吉田医師、庄司の友人で雑誌編集長の松村、その部下の杉原と梶尾宏子が織りなす複雑な恋愛模様であるが、ここでは以下にどのような場面でどんな野鳥が出現しているかを紹介しよう。

最初に松村らが後楽園球場でナイターゲームを観戦するシーンがあり、ここではアカエリヒレアシシギが球場の上空を飛び、何羽かがバックネットに衝突して落鳥する様子

が描かれる。

次に秋の渡りの時期に庄司らが江戸川河口周辺へ探鳥に行くが、この場面で出現するのは、チュウサギ、アオサギ、ムクドリ、カイツブリ、バン、オオバン、ヨシゴイ、マガン、ウグイス、モズ、アオアシシギなどである。

録音のために行く冬の伊豆半島ではヒヨドリ、ツグミ、ホオジロ、シジュウカラ、ムクドリ、キセキレイなどが出ている。

ラストシーンは早春の下北半島で、津軽海峡を望む大間岬をアカエリヒレアシシギの群れが鳴きながらを渡っていく様が印象的に描かれる。ほかにはウミネコ、カワウ、オオハクチョウ、シノリガモなどである。

以上のほかに、小説の具体の場面に出てくるわけではないが、名前だけが登場するものにナベヅル、ジョウビタキなどがあり、これらを加えると登場する鳥は60種ほどになる。この小説は、昭和33年に角川書店から刊行され、文庫本にもなったが、現在は絶版で、入手は困難と思われる。筆者は、札幌市中央図書館から単行本を借り出して阅读した。



野幌森林公園

2007.11.4

【記録された鳥】トビ、ノスリ、マガモ、コガモ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、シメ、カケス、ハシブトガラス

以上 20種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、岩崎孝博、牛込直人、岡村宏樹、岡村和子、香川 稔、久保田喜代美、後藤義民、坂井伍一・俊子、佐々木英之・玲子・七菜、品川睦生、白澤昌彦、杉田範男、田中 洋・雅子、千葉久子、徳田恵美、戸津高保、成澤里美、橋爪聖之、畑正輔、浜野チエ子、原 美保、辺見敦子、真壁スズ子、松島伸子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、渡辺 偕

以上 41名

【担当幹事】松原寛直、横山加奈子

ウトナイ湖

2007.11.11 江別市 浪田 良三

2年ぶりにウトナイ湖の探鳥会に参加しました。気象情報では、当日の天気マークが傘マークの連続で心配していましたが、現地では、どうにか雨に当たらず幸運でした。

ウトナイ湖は、湖畔に立つと視界が広まり、自然らしきもどうにか保たれていて、さあ、今日は何が見られるかと期待が膨らみます。

今回のウトナイ湖では、特に珍鳥は出なかったものの、私にとっては、オオバンの60羽とカウントされた群れに出会って十分に見ることができたこと、隊列を組んで飛んでいるヒシクイの群れに、マガンが1羽混ざっていた光景を初めて見ました。地上（水上）で両者が一緒に見られることはままたりませんが、飛んでいる姿でその大きさを比較して見られたことなどが収穫でした。

一方、アオサギはすでに見当たらず、コブハクチョウも確認できなかった。ワシの仲間では、オジロワシが遠く対岸の雑木林に止まっていたましたが、通常より白っぽく見え

たのが気になりました。自然界では図鑑などとは違って見ることがよくあり、これは実際に観察することの大切さと感じさせられます。

ハクチョウの群れが、整然と隊列を組んで優雅に飛翔してきて湖面に着水するさまに感動しました。渡りの季節には、晴れた日の夜間、大麻の上空をハクチョウがV字形の隊列を組んで通過する情景に出会うことがあります。そのとき受けた強い感動を思い出しました。

サンクチュアリ・ネイチャーセンターで鳥合わせの後、昼食を食べてから、探鳥をしながら歩いてきた遊歩道を戻りましたが、歩道近くの枯れたヨシ原に居たらしいオオバン10数羽が湖面に飛び出し驚きました。しかしそれで、かなり近い距離で改めてオオバンを見ることができ、満足な気分です。ウトナイ湖をあとにしました。

最後になりましたが、当日の当番幹事の方がたにお礼を申し上げます。

【記録された鳥】ウミウ、ダイサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、マガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、カワアイサ、オオバン、オオセグロカモメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス
以上 31種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、岩崎孝博、大賀 浩、後藤義民、小堀煌治、田中哲郎、戸津高保、中正憲信・弘子、浪田良三・典子、成澤里美、浜野チエ子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、山田良造、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸
以上 22名

【担当幹事】鷺田善幸

野幌森林公園

2007.12.2 札幌市北区 原 美保

木の葉が落ちて見通しが良くなった木々の間を、小鳥が飛び、声が聞こえます。皆はめいめいの方向を向いて見えています。「メジロがいる」の声で捜したけれど見つけれず、教えていただいた時にはヒヨドリに追い出されていました。少し前からエナガの声がして（教えていただきました）、1羽見えていましたが、ホウの木に8羽止まっています。少し遠くてすぐ飛んで行きましたが、かわいい姿を見ることが出来ました。

積雪は2~3cm位でしたが凍っているのか、その下の道が凍っているのか、皆で歩くとザクザクと音がしてうるさいくらいで鳥の声が聞こえなくなります。目で捜すとハシブトガラとゴジュウカラが多く見られました。久しぶりにオオアカゲラを見ました。

最初の休憩所の少し手前で、戸津さんがクマゲラの声が聞こえたとおっしゃいました。皆で静かにしていると私も聞くことが出来ました。南の方に飛んで行ったようですが、残念ながらコースは反対に曲ります。

今回のコースは、フクロウが見られるかしらと楽しみにしていました。2羽並んでいるのを見られて嬉しかったです。ずいぶん遠くにいるのに、ピンポイントの場所を教えてくださいました。

今年最後の探鳥会は、クマゲラの声が聞け、フクロウが見られて楽しい会でした。来年も沢山の鳥と会の皆さんとお会いして、お話をうかがうことを楽しみにしています。

歩き始めてすぐに白澤さんから感想文を頼まれました。「珍しい鳥出してくれたら、クマゲラ見せてくれますか?」と言いましたら、「努力します」とおっしゃったので、クマゲラの声が聞こえた時はびっくりしました。白澤さんはニコニコ顔で「クマゲラ出ましたよ、お願いしますね」。実物は見られませんでした。愛護会では声もリストに入りますので、書くことになりました。

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ウソ、シメ、カケス、ハシブトガラス
以上 21種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、香川 稔、河野美智子、小西峰夫・美美枝、小堀煌治、後藤義民、品川睦生、白澤昌彦、戸津高保、田中 洋・雅子、徳田恵美、富川 徹、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、早坂泰夫、原 美保、辺見敦子、前多輝明、松原寛直・敏子、安 真一郎、山本和昭、山本昌子、陽 美保子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子
以上 34名

【担当幹事】白澤昌彦、戸津高保

小樽港

2008.1.20 札幌市北区 道場 優

いつも幹事以外の方に書いてもらう「探鳥会報告」。たまには、幹事の目で見た探鳥報告もいいのでは、と思ひ自身は、「バードウォッチング」と「人間観察」の報告書。

今日は昨年に引き続き、札幌から貸し切りバスで小樽港周辺を回る「冬の海鳥観察会」。札幌をバスで出発とあって満員の参加者。皆さん朝8時半の集合にもかかわらず、いつもながら早いこと。防寒のために「着膨れスタイル」、背にはザックの格好で大通り公園に集合する。道行く人は、「まだ雪まつりでもないのに、集団でいったい何?」と、異様な感じを持ったのでは?そんなことなんか関係ない!と、バスの中は今日の期待と熱気に包まれていた。

白澤幹事より小樽港探鳥会がスタートして31年の歴史も

披露される。日本野鳥の会小樽支部はもとより、江別支部との合同の探鳥会があったことを知る。

いつもながら、幹事への期待は大きい。曰く「今日は晴れるんでしょうね?」「鳥は〇〇と、△△はきっと出してくれるよね?」と圧力的?要望など。幹事の返事は「天気と鳥は皆さんの精進しだい」と軽くかわすが、内心は「海が荒れてあまり見られなかったらどうしよう!」と、実はこころ穏やかではなかったんですよ、皆さん!

幸いに今日は曇の天気予報だが、時折太陽も顔を出し、海は穏やかで探鳥日和。ところが、祝津の日和灯台に着くと、そこはやはり外海。海はそれほどでもないが、観察する断崖の上は吹雪模様。吹き溜まりの道路、幹事が先導して雪を掻き分けて進む。観察中も風は雪を伴い吹雪、皆の顔は真っ赤、体も飛ばされそう。しかし、そんなことはものともせず頑張っている。その甲斐あってか、なんと探鳥会では20年ぶりに“クロガモ”を探し、“ピロードキンクロ”も9年前に続き通算2回目のお目見え。帰って資料を見てびっくり。よくやりました!

祝津港・高島港・小樽港は内海で、風も穏やかでじっくり観察ができる。鷗類の観察会では「何年もの幼鳥」だの、「羽根の色が薄い」だのと、今回初めて参加した友人は目を白黒。皆さんの熱心さに圧倒された様子だった。高島港では、小樽海岸では初めての“コクガン”2羽を観る。ガイドをしてくれた地元のU氏は満足げ。ところが他の集団はと見ると、「コクガンは他で観たから」と、別の方向を見ている。これにはU氏も苦笑い。



コクガン 2008. 1. 20 小樽港探鳥会にて

手宮埠頭で、愛らしい“ホオジロガモ”の集団求愛も見られた。“スズガモ”も群れていた。外の寒さもなんのその、誰もバスの中に戻らない。これにはバスの運転手さんも、「何がそんなに夢中にさせるのか?」と言ったあきれ顔。昼食をフェリーターミナルでとる。食事も早々に、外へ出て海を覗いている人。「“ハシブトウミガラス”が出たよ」と、わざわざ皆を呼びにきてくれる。いつもうちの会

員はうれしい“ご親切さん”ばかり。

黙っていたら、いつまでも覗いていそうな雰囲気の中、幹事の一声で、本日の探鳥会は終了となる。今日も和気藹々のうちに、「冬の海鳥観察会」は終わった。プレッシャーをかけられたが、珍しい鳥が3種も出てくれたし、例年に近い35種の鳥の出現。幹事としては面目躍如だった。

参加の皆様、満足していただけたでしょうか?

【記録された鳥】オオハム、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、コクガン、マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、クロガモ、ピロードキンクロ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オジロワシ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 35種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、岩崎孝博、白田 正、梅木賢俊、岡部良雄・三冬、影安則子、蒲澤鉄太郎、岸谷美恵子、北山政人、栗林宏三、蔵前 徹、小西峰夫・美美枝、志田政子、品田睦生、清水朋子、白澤昌彦、高橋きよ子、竹田芳範、田中 洋・雅子、道場 優、徳田恵美、戸津高保、中嶋慶子、中正憲倍・弘子、西川喜久世、二反田公仁子、成澤里美、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、前多輝明、松原寛直・敏子、宮崎嵩司、安 真一郎、山田良造、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎以上 46名
【担当幹事】白澤昌彦、道場 優

野幌森林公園

2008. 2. 3

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ウソ、シメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 21種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、伊藤 牧・俊子、牛込直人、蔵前 徹、栗林宏三、小西峰夫・美美枝、品田睦生、竹田芳範、田中志司子、道場 優・信子、徳田恵美、戸津高保、中嶋慶子、二反田公仁子、成澤里美、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、早坂泰夫、辺見敦子、前多輝明、真壁ズズ子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山内 昂、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、渡辺 偕 以上 37名

【担当幹事】 松原寛直、道場 優

鳥民だより

◆総会のご案内

日 時：平成20年4月11日（金）午後6時30分
場 所：かでの2・7 320会議室
総会終了後に懇親会を予定しています。会員の皆様、多数ご参加下さい。

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

<野鳥写真展>

期 間：平成20年5月6日（火）～5月17日（土）
場 所：光映堂2階ギャラリー
札幌市中央区大通4丁目
電話 011-261-0101

なお、展示作業は5日の午後5時30分から、撤去作業は17日の午後5時から行う予定です。お手すきの方はご協力願います。

<写真募集>

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林店長まで。5月5日に直接持参する場合は事前に連絡願います。出展者には光映堂の本店と地下街店で使える商品券（2,000円分）を進呈します。

問い合わせは 小堀煌治
011-591-2863（午後7時～10時）

◆刊行物のご案内

当会顧問の藤巻裕蔵さんが以下を発行されましたのでご案内いたします。

藤巻裕蔵編著 2007 北海道の猛禽類ークマタカ、オオタカ、ハイタカ、ハチクマー（CD版）北海道猛禽類研究会発行

おもな内容は、猛禽類4種の分布、営巣環境、営巣木の特徴、巣の形態、繁殖状況、保全対策、オオタカ調査指針（案）です。

1部1,180円です。購入申込は上記研究会事務局担当の三浦和郎（E-mail: km701@docon.jp）まで。

◆平成20年度会費納入のお願い

この号（第151号）と一緒に郵便振替用紙を入れてあります。速やかな会費納入をお願いします。

◆住所変更の場合にはご連絡を!!

「野鳥だより」送付先住所が変更された時には速やかにご連絡願います。

【新しく会員になられた方】

蔵前 徹 札幌市東区



新年講演会風景 2008. 1. 12

宿泊探鳥会のお知らせ

5月の十勝

平成12年から続いている宿泊探鳥会は、今年は十勝方面で実施します。この時期の十勝は、夏の草原の鳥に加えて冬鳥も見られ、出現する種類はかなりの数になるものと期待されます。

月 日 5月10日（土）～11日（日）

集合場所 札幌市中央区大通西3丁目
道新ビル前（大通側）

集合時刻 10日午前6時30分

札幌帰着 11日午後6時頃

定 員 40名

参加費 1万6千円

（交通、宿泊、食費などすべて込み）

申込み先 蒲澤幹事 電話 011-663-9783
4月1日午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

日 程

1日目（10日）豊頃町湧洞沼などで探鳥

宿泊 豊頃町 十勝ロイヤルホテル

（電話 0155-74-2111）

2日目（11日）早朝 ホテル周辺で探鳥

午前中浦幌町内で探鳥





- ☀ 探鳥会は、悪天候でない限り開催します。
- ☀ 昼食、双眼鏡などの観察用具、筆記具、野鳥図鑑などをご持参ください。
(融雪期や雨天の時は、防寒衣、雨具、長靴などを用意してください。)
- ☀ 公共交通機関を利用される場合には、事前に時間などをお確かめください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ
(社)北海道自然保護協会 ☎ 011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

開催日	探 鳥 地	集合場所及び集合時刻
4月13日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前、午前9時30分
	地下鉄東豊線環状通東駅から中央バス北札幌線東69番・東79番、モエレ公園東口下車徒歩15分。モエレ沼公園内を歩きながら沼の水鳥群、沼畔湿地草原の鳥、林のカラ類などを楽しまします。	
4月20日(日)	宮島沼	湖畔、午前10時
	JR岩見沢駅前発、又はJR石狩月形駅前発、中央バス(月形行又は岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。マガンたちは北帰途中宮島沼に集結。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。	
4月27日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	JR新札幌駅発 夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車、徒歩各5分。芽吹きが進み、夏鳥たちがほほ揃って、森が生き生きとしてきました。深呼吸をしながら進みます。	
5月6日(火)	藤の沢	白鳥園、午前9時
	定鉄バス札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発(定山渓行又は豊滝行)、「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。水辺もあって、どんな鳥が現れるか期待しながら、白鳥園の裏山(藤野マナスル)を巡ります。	
5月10～11日(土～日)	十勝管内(宿泊探鳥会)	本号の13ページ参照
	今年の宿泊探鳥会は十勝方面(浦幌町内・湧洞沼など)で実施します。最も出現種の多い時期ですので、ご期待ください。	
5月17日(土)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関、4月27日の案内を参照してください。夏鳥が勢揃い。木の間に見え隠れするキビタキや、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月18日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場、午前9時
	交通機関はありません。自家用車の相乗り希望の方は幹事に相談してください。千歳川沿い道は自然の宝庫。水辺の鳥、草原の鳥、林の鳥もと欲張って、ゆっくりあるきましょう。	
5月25日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場、午前9時30分
	札幌駅又は地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ペガサス号)、「四季の館」前下車。鶴川河口の広々とした環境が魅力です。人口干潟のシギ・チドリや草原の鳥、また猛禽類が探しどころ。	
6月1日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅、午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。風が運ぶ草原の鳥の囀りを聞きながら湖畔へ向かいます。餌を運ぶ親鳥や、オオジシギのフライトも期待できます。	
6月7日(土)	平和の滝(夜の探鳥会)	平和の滝駐車場、午後6時30分
	地下鉄琴似駅発、JRバス(西野平和線) 平和の滝入口下車、徒歩20分。ヨタカ、コノハズクなどの声、遅くまで鳴くツツドリなど、夜ならではの探鳥です。懐中電灯、防寒衣、防虫薬の用意を。	
6月15日(日)	東米里	東米里小中学校正門、午前9時
	地下鉄菊水駅発、JRバス「東米里小学校前」下車。草地は少なくなりましたが、草原の鳥たちはやってきます。カッコウ、コヨシキリ、エゾセンニュウなどがにぎやかです。	
6月22日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月27日の案内を参照してください。鳥たちにとって一番忙しい、子育ての季節です。初夏の花たちも咲きそろい、目移りしそうです。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>